

令和2年11月

中小企業は小さな一流企業を目指せ  
(大ききではなく社員の幸福を目指せ)

2019年10月30日日本経済新聞1面の記事に「あなたにムソの向題です。日本において、熱意あふれる社員の割合は果たして何%だと思いますか?」とありました。「熱意あふれる社員6%、139か国中132位と世界最下位レベルです。全世界1,300万人のギャラップ社の調査(2017年発表)です。ちなみにアメリカは32%と高い数字です。日本では、その他に「他人の足をムソはっている24%」「やる気がなく働いている70%」という調査結果です。ギャラップ社の調査が私達中小企業に来ることはないので大企業で働く社員の定態なのでしよう。会社が一流かどうでないかは、有名か有名でないか、売上や利益の規模、社員数で一般的に判断されていますが、規模ではなく、質や働いている社員の意識も大事なのはなってしょうか。少なくても熱意あふれる社員の割合が6%しかない会社の94%の社員は一流の社員では無いことは確かです。今日は質と社員の意識で中小企業ではあるが一流の会社が日本にはいっぱいあることを書きます。

会社の評価といえば銀行の格付表がありますが、中小企業はどんなに内容がよくても格付が4以下です。(社長の成績表・銀行版)規模が格付を低くしています。また帝国データバンクの評価分析では中小企業はクラウ上位の55点が最高でそれ以上のランクに在ることはありません。これも規模が中心です。すなわち、中小企業はどんなに内容がよくても超優良企業にはなれないのです。そこで私は規模の量ではなく、質によって中小企業の評価をしようとして「社長の成績表・中小企業版」を作成し、中小企業の格付も行なった結果、浅井工業(株)様は、社員15名の水道工事会社ですが6つの経営指標の全てが5点満点中5点です。しかもそれぞれの5点ではなく目標値をはるかに越えています。社長は2代目ですが、人柄がよく誰かにも好かれ古田士会計との付き合いも30年近くに在り、3代目の息子さんも入社し、息子さんのルートで若い社員も入社してくれています。水道工事業はどんな人手不足ですが若い社員が定着しているという事は、社風がよく中小企業だからこそできる家族的経営をしているからだと思います。会社が一流かどうかを銀行等の世間一般では売上高、資本額、社員数などの量で判断しますが、量ではなく質で判断するのが正しいので「社長の成績表・中小企業版」では全て比率で格付をしています。銀行等の格付Hがそれほど高くなくても古田士会計の格付が高ければ立派な超優良会社です。一流の会社です。社長も社員も自社に誇りを捧げてほしいと思います。中小企業でも評価が4点以上の超優良会社はいっぱいあります。企業が一流かどうかは数字だけではなく、会社の姿勢や社員の姿勢も大事です。やる気の無い社員や他人の足をムソはっている社員が90%以上の会社が一流である術がありません。私は一流の会社は、業績がすぐれているだけでなく、社員の個性も高く在ってはいい、自己の損得よりも利他の心により行動し尊敬される社長のもとで理念、使命感を共有する社員の集団であると思っています。理念、使命感の共有は、大企業では無理ですが中小企業なら出来ます。大企業と中小企業では社長が見ている方向が違いますが、中小企業の社長は、全社員の顔が見えます。家族も見えます。社長が1人1人に会社の理念、使命感を熱く語る事ができます。社員の幸福を追求する経営ができます。社員が熱意にあふれ、生き生きと働いている会社が一流会社で世間に誇れる会社です。中小企業は小さくても一流会社に在るので、一流とは本物ということですよ。

12月の相談日、12月12日、19日、26日

古田士 満